活動状況報告（6 月）

文化芸術コース　４期生　北浦　由花里

6 月は実技試験が多く、とても忙しくしていました。ピアノ室内楽といわれる、いわゆる伴奏のクラスの学年末試験がありました。1 年間、ピアノソロと並行して力を入れて学んできたので、思い入れのある授業でした。このピアノ室内楽の学年末試験は 3 人のパートナーと臨みました。ヴァイオリン、チェロ、声楽です。それぞれ国籍や、彼らが持つ音楽性の違いがありましたが、良い関係を築きながら、彼らからたくさんのことを学びました。

この実技試験では、ヴァイオリニストとモーツァルトの「Violin Sonate in G major K.301」。チェリストとショパンの「Introduction et Polonaise Brillante op3」。歌手とグノーの「Faites-lui new aveux from Faust」、ヨハンシュトラウスの「Act2: No.7 Couplets from Die Fledermaus」、ビゼーの「Carmen Seguidilla」を演奏しました。

ヴァイオリニストとはコンサートなどで何度も演奏していたので息を合わせて演奏できたと思います。彼女との練習では、お互いに曲をどう構成したいかをよく話し合いがら行なっていました。お互いに手本を示したりしながら、二人の理想の音楽に近づけることができたと思います。

チェリストとは、二人で練習するチャンスが少なかったのですが、お互いにそれぞれのパートを弾き込んでおいたおかげで、1 回の練習で息の合った演奏をすることができました。以前先生が、「パートーナーと練習する前に、絶対に自分は完璧にしてから臨みなさい」と仰っていたのを思い出しました。全くその通りで、少ない合わせの練習でも質の良いものが出来上がるのだと実感しました。このチェリストの彼とはショパンを演奏したのですが、この作品にはポロネーズ(※ポーランドの民族舞曲、民族舞踊のことで、特徴的なリズムパターンを持つ)が出てきます。このポロネーズという民族舞踊は、ポーランドの高校の卒業式パーティで踊られるようで、ポーランド人であれば誰でも踊ることができるようです。このチェリストの彼はポーランド人だったので、とても素晴らしいリズム感でポロネーズを弾いてくれで勉強になりました。留学の良さの一つとして、その土地の民族音楽について、ネイティブの演奏を聴くことができる、という点が挙げられると思います。

そして歌手とは、たくさんのオペラの作品を演奏しました。それぞれ全くキャラクターの異なるオペラでしたが、どれも勉強になりました。彼女は非常に役の切り替えが上手で、彼女の表現力にいつも圧倒されていました。曲が変わると、まるで全く違う人物が目の前にいるのです。そんな彼女に近づきたく、バランス、音色、音質、歌詞等を研究していました。特にオペラだったので、場面や状況の整理、人物の心情など考えるべきことがたくさんありました。先生やパートナーからもアドバイスをもらい、本番はそれぞれ全く違うキャラクターを彼女と一緒に演じることができたのではないかと思っています。

11 月から始まった留学生活もそろそろ終わりが見えてきました。来月は、ポーランドの地方に訪れ、音楽祭に参加する予定です。残り期間も全力で勉強していきたいと思います。